

へ帰還。家族は皆元気で、喜んで迎えてくれた。

私は三十歳で入団した。結婚は昭和十三年三月三十一日でした。子供は一男三女で、皆元氣。私の戦後は農業委員、農協役員、神社や寺の総代等を歴任して現在はまだ九十歳。隠居です。

### 抑留の屈辱に耐えて

福島県 猪俣 傳

大正九（一九二〇）年十二月二十七日、父傳一の長男として生まれ、姉二人、妹一人、弟一人の五人兄弟として幼少時を過ごしました。家は中程度の農家で、米作りと薪炭を作っていました。

父が近衛兵の軍人として過ごしたことから、折にふれて話してくれた軍隊当時の様子を子供の頃から聞かされ、また写真なども見せられて兵隊当時の父の姿がとても立派に見えて、自分も早く大きくなつて父のように近衛兵となれたらよいと思いつづけておりました。

昭和十（一九三五）年三月、熱塩村尋常高等小学校高等科を卒業し、さらに中学校に行きたいと父に話したところ、今十一人の家族をかかえ大変な時にとても中学校などにはやれないと言われ、止むなくあきらめて青年学校に入り勉強しました。

主として夜間授業で、家業が終わると即、夜学ということで大変でしたが、中学校に行けなかった口惜しさと、あの人達には負けたくないという気持ちしが重なり、それらが励みになって頑張れたと思います。

そんな頃、村役場からの誘いもあつて役場の職員として就職することができ、先輩の皆さんの指導を受けながら勤めておりましたが、徴兵検査で甲種合格となり、海軍に入隊となりました。このため役場を退職いたしました。

前述の通り海兵団入隊ということでしたが、かねがね父の後姿を見て陸軍は近衛兵にあこがれて参りましたので、意外な結果に一時は意気消沈の時もありました。しかし国のために兵隊に行けることは男子の本懐、海軍も同じと思ひ直し海軍に入隊することになりました。

弟・正も兄貴が海軍に入隊することになったから、俺も海軍を志願するといつて志願し、昭和十七年五月一日に横須賀海兵団に入団しました。

私は昭和十七年六月には妻ミツ子と結婚し、後顧の憂いなく勇躍、入隊できることになりました。

昭和十七年九月一日、横須賀第二海兵団第六十二分隊（陸軍一個中隊と同じ）に入団、海軍二等整備兵として新兵教育を受けることになりました。一個分隊は十二教班編成で私は第三教班に配属されました。

一週間位たった頃と思いますが、小泉班長が「誰か字を上手に書ける者がおるか」と聞きましたので即座に「ハイ」と手を上げたら、班長がじつと私のところを見ておられたが「では猪俣、お前が今日から班務として班の仕事をするように」と言われ、新兵として重責を負うようになったのです。これも入隊前に役場の書記として勤めた結果だと思ひました。

また、入隊と同時に陸戦ということで、徒手教練から小隊教練などがありました。以前青年学校で研究科まで軍事教練をやってきましたので、

これも他人に引けを取ることなく過ごすことができ、三カ月の新兵教育時代を優秀な成績で終わることができました。そして十二月一日付で海軍一等整備兵を拝命しました。

昭和十八年十二月十日、館山海軍航空隊に配属され入隊しました。いよいよ実施部隊に配属になって一人前の兵隊として勤務することになったのですが、海兵団当時とは全然違い、古年兵からの指導は想像以上でした。日常の生活が共同体であること、一人に不備なことがあれば全員制裁という鉄拳が飛ぶ。目から火が出るとは聞いていたがまさにその通り、よろける足を踏み締めながら、ぐつとこらえる。

ある時は全員整列で「精神注入棒」というバスターが容赦なく臀部に喰い入る。「よし、今日はこれまで解散」の号令にてホッとしてハンモックに入る。お尻が痛くて、あおむけには寝られず、うつ伏せになってもなかなか寝付かれない。こん

な日が続く新兵の辛さを、よく耐えたものだと今にして思われます。

入隊して六カ月が過ぎた頃と思うが分隊長に呼び出され「猪俣、お前は今日から司令従兵として勤務することになるから充分注意して勤めるように」と言われ従兵室勤務となりました。

館山海軍航空隊司令の海軍大佐・藤田元茂、この方の身の廻り一切を、お手伝いすることになったのですからまさに日常、身の引き締まる思いの連続でありました。

司令従兵の勤務は三カ月毎に交代することになるので、ようやく、その任務を終えて自分の班に戻り、しばらく着なかつたエンカン服（つなぎ作業衣）に着替えるため室に行っていたら、当直将校が、あたふたと走って来て「猪俣、今からすぐに司令従兵室に行くように」とのこと、また元の従兵として勤めることになったのです。後で聞いたことですが、司令の許可なく人事を替えたことで、

当直将校が司令からお叱りを受けたということでした。

お陰で上等整備兵になるまで司令従兵として勤務し、三八一空へ転属の下令により解任された時は、司令から司令個人の写真を私に直接下され、感激し、今もって記念のアルバムに貼り、往時を思い出し、藤田大佐の消息に意を寄せている昨今です。

昭和十九年五月一日、上等整備兵となり、同月十二日、海軍三八一空に転属のため門司港出發しました。

いよいよ戦況も激しさを増し、南方諸島の玉砕等のニュースが流れるようになり、これらの補充が急を要することから、我が部隊にも派兵の要請があったようです。

五月十二日、輸送船団に乗り込み、南方シンガポールに向け出航しました。

輸送船十二隻が巡洋艦二隻に護衛されて一路南

海へと進みました。途中、一週間位過ぎた頃と記憶しておりますが、ある日夕暮れ近くに突然「配置につけ！」の号令に駆け出すと、前方三隻目の輸送船が火柱を上げ沈没するのが見えました。あとは暗闇の中になりましたので、何隻沈没させられたかは知る由もありませんでしたが、兵隊を乗せた輸送船団を攻撃した敵潜水艦の恐ろしさを知らされた一瞬でした。その後は難なく航海し、奇しくも海軍記念日の五月二十七日に無事シンガポール港に入港、上陸しました。

そして昭和十九年五月二十七日、海軍三八一空隊に転入しました。この航空隊はゼロ戦と艦上攻撃機で編成された実戦部隊でした。南方諸島を護るため編成された部隊らしく、各鎮守府より派遣された兵隊と、空母が撃沈され生き残った者たちの集まりによって班が構成されていました。

我が班の班長・八代兵曹もその一人で、白髪まじりの筋金入りの上曹（曹長）でした。幾度かの死線を越えてきた、たくましいその風貌に、限り

ない信頼感で仕えることができました。お蔭で実戦に対応する心構えができたことを覚えております。

昭和十九年十一月一日、二等整備兵曹、昭和二十年二月、海軍二八一航空隊へ転出しました。

ジャワ島バタビヤより陸路スラバヤに進入、当飛行場を拠点として警備の任務に就きました。この頃になると米軍のB 29や戦闘機の来襲が烈しくなり、友軍機を分散して被害を最小限におさえる等の任務が多くなってきました。加えて敵機の爆撃による戦死者も多くなり、とうとう部隊撤退ということ、部隊の大半は船でジョホールバル空港に向け出航したのでした。そして昭和二十年五月一日、一等整備兵曹となりました。

部隊の大半が撤退したあと、私は甲板下士としての立場にありましたので、本部と共に残務整理にあたり、半月ほどして飛行機でジョホールバル空港に復帰したのですが、とうに着くはずの部隊

が途中、敵の潜水艦の攻撃を受け、大部が戦死したとの報に接し悲憤の涙を流しました。

昭和二十年六月三十日、海軍三八一航空隊に復帰。

艦上攻撃機や零戦の整備等、各戦闘に備え必勝の精神を鼓舞して任務に当たっておりました頃、戦況険悪との情報が流れた中、突然、終戦の報に接し、わが耳を疑いました。

時を移さず部隊全員集結し、高橋分隊長が正装し、しっかりと軍刀を握りしめ悲壮な声で「誠に残念だが敗戦ということになった。この上は、どうなっても諸君と一緒に生死を共にすることになるから、決して軽はずみな行動をしないように」と悲憤の涙で訓示をされたのが、今もって脳裏から消えません。

こうして終戦（セレタ軍港にて）

昭和二十年八月十五日。

かくして終戦処理が始まったのですが、思い余

つて逃亡する者も続出しました。運を天にまかせ  
て、たとえ戦いに負けても精神までは負けないぞ  
と心に秘めておりましたが、有無を言わせず、捕  
虜として抑留されたときは、その屈辱に幾度とな  
く唇を噛んだことか……。

収容所に一カ月程置かれ、その後マレー半島の  
バットバハーという所に強制労働のため連れて行  
かれ抑留生活となりました。

そこでの生活は食事制限を受け、一枚のパンと  
パイヤの塩漬け、よい時でタピオカ一個に飯粒  
を混合した一握りの米食だけで労働をさせられる  
有様で、抑留生活を、いやという程強いられた。  
また腹をこわした者もあり集団赤痢が蔓延し、  
そのために命を落とした者もありました。

そんな中、反乱を起こすこともないということ  
でしょう。だんだん食の事情も良くなってしま  
した。それでも自給自足といって荒地を耕して、さ  
つま芋を植えて、飢えをしのぐということでした  
が、それができるまでの間は筆舌につくしがたい

苦難でありました。

時を同じくして陸軍の方々も抑留され強制労働  
をされたのですが、収容所から労働現場までは駆  
け足をさせ、監視兵は車上より小銃で威圧しなが  
ら往復させる有様で、こんな屈辱を甘んじて受け  
ながら生きて帰る日に望みをかけながら耐え忍ん  
でまいりました。

それから一年、昭和二十一年七月、ようやく帰  
還できる日が、やっと参りました。幸いにも私は  
妻帯者ということで復員船の第一便に乗船するこ  
とになり、戦友諸君と別れて帰国の途につきまし  
た。そして乗船するまでに幾多の検問を受け、着  
のみ着のまま乗船し、昭和二十一年七月二日、  
なつかしの祖国の土を踏むことができました。

帰国してからは、運良く復員できました事を胸  
に秘めて、社会のためになる事に専念しようと思  
い、まずは消防団員として復帰、入団以来四十三  
年間勤め、団長の重責をも果たして昭和五十七年

四月二十九日、叙勲の栄に浴し、勲六等単光旭日章を拝受いたしました。また昭和四十一年九月二十日、保護司を拝命、以後三十二年間、更生保護事業に貢献したことにより法務大臣表彰の栄にも浴しました。

この内助の功として妻も全国保護司連盟会長より表彰状を受賞することができました。

その他に行政相談員、村土地改良区、森林組合等の監事として、さらには村社会福祉協議会理事として会長職も勤め上げて今春退任し、現在には恩給欠格者連盟熱塩加納支部監事として、欠格者処遇の万全を期されるよう県連会長に強く要望しながら会員と共に頑張っておるところであります。

## 終戦前後

### 十八カ月の体験記録

山形県 梅津儀操

#### 一 出征

私は大正十四（一九二五）年一月二十五日、梅津家の長男として生まれ、家族は両親、祖母、妹四人、第一人の九人家族で、専業農家でしたので学校を卒業すると農家の後継者として食糧増産に励んでいました。大東亜戦争も日を追う毎に拡大し、男と言う者の大半が兵隊として出征して行きました。そのため兵隊検査年齢も繰り下げられ、二十一歳にならない私達にも徴兵検査の通達が来て、昭和十九（一九四四）年七月には検査だったと思います。しかし私は近視のため第一乙種合格となり、その後同級生の甲種合格者になった者たちの入営送別等に激励していました。

昭和二十年四月、沖繩戦の二カ月前の二月三日、